せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一一二号（一日発行）
平成十一年一月一日

年表で読む 古平の歴史 (20)

■古平～美国間道路（続き）

明治十三年に改修された道路は、丸山中腹の青峯観音堂の辺りから少し下り、切り通しの海側を回って、恵比寿神社の辺りから現在の群来町を通る道路に出たようです。その道路に向かって恵比寿神社の古い鳥居が、置き忘れられたように今も残っています。

また、そのそばには、後に建てられた旧群来小学校跡の大きな土台石も見られます。

恵比寿神社から現在の道路付近に上がったところから、さらに奥に入るとやや平地があり、七軒町と呼ばれていた一角がありました。

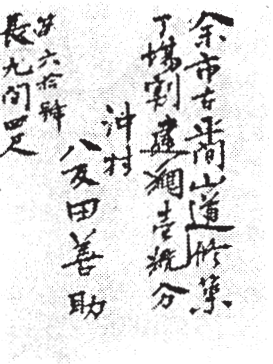
家が七軒あったことからそう呼ばれるようになったのですが、いつごろからそのような集落ができたのかはわかりません。また、住んでいた家も四、五軒は分かっているのですが、どうもはっきりしません。どなたか知っている方がおりましたらお知らせください。

（ちょっと余談になりました）

■余市～積丹間道路改修

明治十六年（一八八三）、「北海道二将来施設スベキ事業概略」の道路開削計画の中に、余市～積丹間道路ほか九件が予定されていて、その費用として二百五十八万円余りが計上されていましたが、当時の情勢としては実現が困難な状況でした。

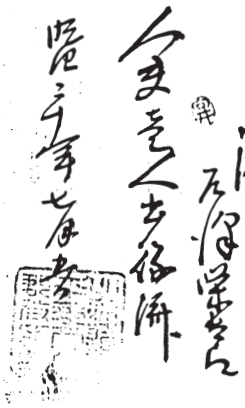
郡長であった佐本光暉は、余市～古平間の道路改修工事を計画し、郡内九十か統余りの鰊建網業者に約三キロメートルにわたっての奉仕作業を割当てました。



工事の持ち場は一か統当たり三十メートルほどで、鰊漁業の終了後から工事を始めて七月に終わり、改修工事によって荷馬車も通れるようになりました。

割当ての工事が終わった者には上記のような証書を渡し、その労をねぎらいました。

また、道路の開削や改修工事には人夫として出ることを義務づけ、出た者には〈出役済書〉を渡しました。



謹賀新年
平成十一年元旦

古平町史編纂委員会委員長　越中庄司
八木金蔵・丹後藤雄・岩崎勝偉・木村輔宏
本岡鉄男・山口文彦・西館昌巳・高野俊和
宮本正敏・水見八郎・田岸倉治
古平町史編纂室室長（総務課長）中野啓一
嘱託　村井芳男

高野名幸作さんの日記から

浜辺の世相を綴る

【13】

大正四年

12／4　品物が安いというので、美国方面からも多くの客が来るようになった、勉強し薄利多売で事業を拡充せねばならぬ、今までの小間物、足駄類をやめて、漁具専業の店に改装することにした

12／6　夜、古平座へ芝居を見に行ったが、あまりにもお粗末でおも白くないので途中で帰る

12／10古平・余市間定期船の日本丸が去る七日の大時化で、余市湾内で岸に寄せられ破砕したとのこと、損害四千円だという

12／22　古平農友会を組織替えするので賛成してくれと、原田さんが来る、農業発展のためには喜ばしいことだ

12／23　カレ網一艘で、今月は十五円から十六円ぐらいだという、実にひどいことだ、年末だというのに漁が悪いので市中はさびしい

12／26　カレ網、この日は二百貫から三百貫を上とし、百貫（約三百七十五キログラム）程とれたという

大正五年

1／6　綿糸の需要が多くなった、網類はもう全部綿糸に代わってしまった

1／7　役場で農会の総会があり二十余名が出席、評議員の選挙、滞納金の処分、夕方から物産組合の宴会がよか楼である

1／9　㊐で火災予防組合の協議会がある、東部組合へ北海道庁長官から表彰状が来たことが披露された、組合長が熱心で、ここ五年程の間は半鐘の音を聞かない、甲寅貯蓄会の総会がある

1／15　鰊刺網が意外に売れる、商売は一、二、三月が勝負である、のんき倶楽部の懇親会が大黒屋である、集まったのは局長、北銀支店長、仲谷勇、小町、カ、八反田など十人だ1／16第一回信用組合総会が学校で開かれ出席す理事、監事、信用調査員選挙あり、八十余名が出席

1／17　夜、㊐で火災予防組合の懇親会を兼ねて慰労会がある。二十名程出席、一円三十銭の会費でずいぶんご馳走が出た、これでは気の毒だ

鰊刺網を販売したのは一昨年だったが、今は湯内、島泊、積丹、美国からも客が来るようになった、薄利多売で奮闘した成果だ、これからも続けなければならない

1／25　正午から禅源寺で農友会の発会式がある、会長に㊐主人、副会長に平田さんを選出する

1／30　十一時頃、入舸から網を買う客が来る、五時頃出て来たという、昼食を出す、雪が一尺も積もる

2／4　余市間定期船富丸に対抗して、この度、砂川丸が料金を三十銭に勉強して航海するという広告が出る、富丸も相当の打撃だろう

2／7　青森行きの汽船が二艘港内に停泊している、宗谷丸もいる、富丸と砂川丸の競争は激しく、二艘とも同時に出港して、沢江沖を競争しながら走っている、富丸、砂川丸の競争は意地の張り合いになっているそうだ

2／14　天気が良くなって古英丸、美国丸、富丸が入港して来た、美国からガンズ網五百間程を買いに来た

2／15　カレ漁が大漁で三百貫ぐらいとる、漁師はカレの荷造りで夜業している、

2／17　新地三主人の葬式、近所の人が編笠をかぶって行列するのを初めて見た、町長や町会議員、赤十字社、友人などからの弔辞がある。

――次号に続く――

古いノートから ②

稲倉石の思い出つづり

[13]

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

稲倉よいとこ

―（昭三十九・六記）―

長かった冬がようやく過ぎたと思ったら、あっという間に春がやって来た。

険しい岩肌を見せていた山々も、今では木々の若芽が一斉に色づき、緑・黄・赤などの鮮やかな彩りに包まれ、私たちの目を楽しませてくれる。

秋の紅葉も、里の皆さんに見せたい絶景ではあるが、大地の胎動が甦るこの季節がたまらなく美しい。

六月十二日の山神祭を迎える頃になると、山菜もまた真っ盛りとなる。

ウド・ゼンマイ・ワラビ・タケノコ・ワサビなどが、新鮮な香りと共に、食卓をにぎわしてくれる。

山の四季を通じ、まことに快適な稲倉石の昨今である。

静かな境内

―（昭四十・六記）―

社宅のはずれにある小高い台地に「稲倉石神社」がある。

稲倉石では、唯ひとつの静粛で神聖な境内だ。

六月十二日がご祭礼の日で御祭神は

大山祇神
（オオヤマズミノカミ）
金山彦神
（カナヤマビコノカミ）
金山姫神
（カナヤマヒメノカミ）

の御三神で、山々をお護りし鍛金・造金を司る神様との事。

境内はひっそりと静まり、鬱蒼と茂った木々は、枝と枝とが絡み合い、快い風がひんやりと肌を撫でて行く。

・何もかも、すっぽりと雪に埋もれ、粉雪が音もなく舞い降りる純白の冬。

・若芽が萌え、四囲の山々が彩づき、自然が甦える春。

・暑い陽差しを受け、社宅の屋根が眩しく光る短い夏。

・全山が紅葉の衣をまとい、真っ赤に映える秋。

四季の移り変わりを眺めながら、ひとりで境内を散策し、内地の年老いた母を偲び、兄姉に思いを馳せるには、最適の場所だった。

にぎわう古平港

―（昭四十一・五記）―

日本海の荒波が、容赦なく埠頭に叩きつけた冬将軍が、ようやく北国に去り、古平港は、春の息吹きと潮の香りでいっぱいだった。

埠頭では、今日も大漁の水揚げと、リールの音をならす大公望たちで賑わっている。

大漁旗をなびかせながら、白浪をかき分けて入港する漁船の群れ、それを迎える家族の歓声が港にあふれていた。

一年の収入のかき入れ時でもある漁師さんたちは、漁獲を降ろすと、家族との団欒もそこそこに、長い汽笛を残して再び漁場へと向かった。

一方、釣りの名所として、釣通たちの溜り場でもある防波堤では、小樽・札幌方面からのマイカー釣キチたちが、徹夜で糸を垂れ、釣自慢に花を咲かせながら、獲物の手応えに一喜一憂していた。

こうして北国の春は、今年もやって来た。

遥かなる故郷の思い出 [52]

役場庁舎上棟式の餅まき

橘　義我　春

古平町史編纂室の村井さんから『せたかむい』と、広報『ふるびら』を送っていただきました。その中に七十年ほど前の、役場庁舎の上棟式の写真が寄贈されたことが出ていました。

「ありゃ、りゃ・・・」

と、急に懐かしくなりました。

実はこの上棟式に、私も子どものころに行ってたのです。

その日の朝のことです。ご飯がすむと母が、

「ドンダ、おめェ、今日は役場の建前で、モズ（餅）まぎ（撒き）だ。いぐ（行く）が」

「ン、いぐいぐ・・・」

「行ぎも帰りも歩ぐンだぞ、おめェ大丈夫だナ」

と、母に言われてついて行くことになった。

当日、母は宝海寺へ届け物があった。母は裁縫が得意で内が職で和服の仕立てをし、お寺の奥さんからもたびたび仕立て物を頼まれていた。お正月やお盆、お祭りが近づくと、町内の人たちからの仕立て物も多く、結構忙しかったようだ。急ぎの注文が重なると母はテンテコ舞いであった。

話がそれてしまったが、この日届ける宝海寺の仕立て物は喪服であった。私が丸山町から浜町まで歩けたので、母もホッとしたようだ。お寺の奥さんからいただいたお菓子を食べながら役場の前へ行ったら、大勢の人がいた。それぞれがいい場所に陣取って上棟式の餅まきを待っていた。母と私は、建築材の板を積んである場所に陣取った。

母は、「ここまで、もず（餅）が飛んで来るべがナ」

と、言いながら、

「もずが飛んで来ても、絶対ここから動かないように」

と、何回もくどいほど言って、私に小さな信玄袋とこうもり傘を持たせると、ほかの場所へ行ってしまった。まわりはみんな大人だけで、子どもはいなかったので心細かったが、何がなんでもこの板の上でがんばろうと決心をしていた。

長い長い時間を待たされて、ようやく上棟式が始まったようだが、私の目の前は大勢の人たちで何も見えなかった。

そのうち、前の方から「ウワーッ」という歓声が上がると、大人の人たちが一斉に動き出した。餅まきが始まったらしい。私の目の前の地面にも、ボタボタと餅が天から降ってきた。すごい勢いで、大人たちが餅を目がけて突進する。私は、それをうらめしそうに見ているだけ。

「そうだ。母は板っこの上から下りるナ」と言ったが、その時ひらめいたのは母のこうもり傘のことだ。板っこの上に座ったまま、こうもり傘をパッと開き、それを逆さにして上にかざしたが、傘がじゃまで何も見えないし餅も降ってこなかった。

「駄目か・・・」とあきらめていたら、なんと、餅がボタボタと音をたてて私のこうもり傘に降ってきた。

やっと餅まきも終わった。すると、私のすぐそばで餅を拾っていた、腰が少し曲がっているオッサンから、

「アンチャ（あんちゃん）なんぼ拾った？」

と聞かれたが、こっちはこうもり傘を支えているのが精いっぱいで、

「わがね（わからない）」

と言うと、

「どらどら、見せでケレ」

と、傘の中をみて、

「ホー、俺より拾ったぞ、たいしたもんでねェが」

ほめられているところに母が戻って来た。腰の曲がったオッサンは母の知り合いだった。

「橘のカッチャ（母さん）どごのアンチャが。見でけれ、俺より拾ったベサ。ねまった（座った）まんま、こんもり（こうも

⇦（次ページ三段目へ続く）

食べたいときに食べるのが一番！

福井幸平

少しわがままなようだが不思議なもので、食べ物には確かに《旬》というものがある。

やれ、秋刀魚が食べたい、やれ、ひらめが食べたいとか？人間はぜいたくにできているものらしい。最近、寒くなると鰰が恋しくなる。俳句の季語にもあるので、参考のために歳時記を調べてみたら十二月で、鱗はなく、ぬるぬるしていて体長十五センチぐらい、背中に灰色の斑点がある。北日本、ことに秋田近海で多く獲れる。初冬のころ産卵のため浅海に浮上して、雷の鳴る日が多いので雷鳴を好んで群れ集まる。故に鰰と呼ばれた。これの塩漬けの上ずみを使ったのが「しょっつる鍋」で秋田の名物である。

秋田名物　八森ハタハタ
男鹿では男鹿ブリッコ
秋田音頭の一節である。

私共の小さいころは前浜（㋕の浜）でも、時化の後によく卵（ブリッコ）をプリプリと口にしたものである。

古平でもハタハタはよく獲れた時代があった。俳句では雷のことをはたはた神ともいう。あまり安くないようだが最近食べさせてもらった。あっさりしてやはりおいしい。醤油汁で食べたり、煮て食べたり、まあまあ満足した。旬のものを食べた満足感かも知れない。

× × ×

ブリッコの打ちあげられし
浜辺かな
文字左程読めぬ子が詠む
板歌留多
威銃谷の深さにひびきけり

（前ページ下段より続く）

り）あっぺ（反対）にして、おづで（落ちて）くるモズ拾ってだ。ちゃっこい（小さい）のにたいしたあだま（頭）いい」と、ほめることほめること。

母は、風呂敷を前掛けのようにして帯にはさみ、あちこち駆け回ってだいぶ拾って来たようだ。母が、オッサンに餅を少しやろうとしたら、

「おら、いらねェてば、ババと二人っきりだで。橘のジジチャンもババチャンも達者だべが。よろしぐナ。アンチャも今日はたいしたけっぱったナ」

と言いながら、オッサンは行ってしまった。

今から十四、五年前に古平の家で、母に、二人で役場の建前の餅まきに行って、たくさん拾ってきたとを話したら、

「そったらごとあったべが、うンだなァ…、あったような気もする。みんな忘れでしまったでァ」

「あの時いだ腰の曲がったオッサンはどごの人？」

と聞いたら、

「誰だがわがねェ」

という返事が返ってきた。もう母の脳裏からは、あの役場の餅まきの記憶は消えつつあったようだ。

この母も、平成八年二月のあのトンネル事故で大騒ぎをしていた二月十四日、享年九十一歳で冥土からのお迎えが来て、阿弥陀様の元に旅立って逝ってしまった。

これで私も、幼いころの思い出話をする相棒がいなくなってしまった。

この稿終わり

川柳

石井愛子

朗らかに今年も暮れそう初日の出
松飾り今年もよろしく老夫婦
初日の出太陽みたいに包みたい

民謡詩

美しいわがふるさと古平
むかしと今と未来の詩

土口　川　義　雄

ンだ　そごだ
俺の生まれは　古平せ
漁師の伴で　にしんもとった
おやこもいるし　墓もある
久しかったと海が呼び
肩をたたきに風も来る

離れて分かるべ　ふるさとは
桜が咲いて　カタクリも
アサヅキ萌える　畔(あぜ)で咲く
あの時季　鶯まだ唄下手で
んだんだ　ケキョと鳴くばかり

一番岩のエンカマは
ガキ大将でも近寄らない
昆布ゆさゆさ　ハゴトコめ
ブラックホールの中で住む

毛がには　足でとるものと
サンマは　手づかみするものと
いくら言っても分からない
たまげだ話と思うだけ

ひろっぱの人には　無理だべさ
たまげついでに　まだ言おう
三平皿のゴリ汁と
ホトケノミミのトロリ味
テンコに盛った　ガンゼ汁
ヒル貝なんかライスカレー
いかソーメンは当り前
鼻にとびつく小女子の皿の
澄んだ味なぞ　まんず分るまい

イモだ　カボチャだトウキビだ
柿栗リンゴもみんなある
グミも　コクワも　クワの実も
口をむらさき　ぶどうも食った

空には鳥飛ぶ道があり
魚の道も海にある
わが古平を北限と
決めて来るのかホンマグロ
なまら　うすったら有難い

海を汚すな　山の木伐るな
にしん去る前恩師は叫ぶ
「今はいいけんど　泣く日が来るけん」
「君らやってる磯の掃除は　鋼線刷毛の一筋ずつに　何万つぶもの胞子がつくんよ」

水産教師千葉先生の
訛懐かし　岩場に立てば
うだで広がる　磯焼けの浜

村を愛した発想が
山野を彩る　芝桜
名も無い里の　山ぶどう
皆で育てた　ワインの町と
白い砂浜　なぜ痩せる
ぐずめぐひまに手を打てば
陽光(ひかり)かがやくリゾート地

知らねふりして　オラでは無い
人のやることキモやげる
ちょうちょも　ちょうぎもなに
してる
らんきになってやってけれ

一人の心の革命は
自分の為より　人のため
みんなで築く　町づくり
二人で語り　三人で無限の知恵
を出し合おう

陸の孤島は　今は無い
国定公園一周と　まちばの人は
声あげる
要(かなめ)の三叉路古平のまち
優れて自慢の景色は無い
急いで買った　素乾品　まちより高くていいのだろうか

せがせるつもりはないけれど
くれでやる程あるものを
少し加工はできまいか
ガヤも大なごも　まだいるし
ヒル貝　ホヤなぞ高級品だ

沖村辺から丸山まで
十分あれば過ぎるまち
足を止めようションベンさせろ
日本一のトイレをつくれ

あへらっと　そこにいる人
この輪に入れ
何でもいいしけ話せば分かる
夢も希望もしゃんべれば進む

雪国の暮らしに思うこと

渡辺ハツエ

明けましておめでとうございます。併せて『せたかむい』がますます発展されますようご祈念申し上げます。

今年の冬の早い訪れには戸惑いました。十一月に入ってからの天候は不順続きで、十八日にはとうとう大雪に見舞われてしまいました。それからは真冬並みの降雪となり、完全に「これは根雪」と思わせるほどの積雪量となってしまいました。

道路は日増しに道幅が狭くなり、運転する人も大変でしょうが、歩行者にとっても危険なことこの上もありません。

月が替わって十二日、御崎町にも待ちに待った除雪車が来てくれました。文明の利器とでもいうのでしょうか除雪車の活躍ぶりはすばらしく、みるみるうちに道路の雪の山は崩されて、アスファルトが見えるりっぱな道路になりました。しかし、除雪車に乗っている運転手さんのご苦労も計り知れません。

かえりみると、私が知っている限りでは、むかしの冬の生活は現在に比べると雲泥の差がありました。大雪が降っても、家の回りはカンジキをはいて踏み固めることと、ジョンバと呼ばれる雪かき道具で、邪魔にならないように雪を積み上げるより方法がありませんでした。〈カンジキ〉は、昔から雪国の暮らしの必需品でした。また、雪は道路に積もり放題でしたから、道路は家の入口よりもずうっと高くなって、雪の階段を作って家へ出入りしていました。

当時は冬になると、荷物を運搬するのに馬そりが通っていましたが、馬フンは道路に垂れ流し？　が普通でしたから、それが春の雪解けどきになると馬フンだらけで、転ばないように気をつけながら歩くのも大変でした。

むかし通った新地分教場の通学路は山坂道で、四年間何気なく通学していましたが、雪の降った朝などは、小使さんが雪をかいて道をつけてくれていたのです。今さらながら当時の小使さんのご苦労をしのび、感謝をしているこのころです。

× × ×

――川柳二句――

年賀状書く手年毎衰えて

宅急便親子の絆太くする

消防車 いまとむかし

竹内コト

むかしはめったに火事はなかったようですが、小さいころ沢江町であった火事は今でも目に焼きついています。

何年ころかはっきりしませんが、ある夜突然、私の家の裏から火の粉が舞い上がりました。

半鐘が鳴り、しばらくして男の人たちが手押しポンプを荷車に積んで引っ張って来ました。近くの川から水を運んできては、手押しポンプをガッタンガッタンと押すのです。現場へ着いてからも準備に手間取り、家が焼け落ちるころになってようやく本格的に水が出るという始末です。消防といっても、トビ口とかかけやなどで燃えている家を壊して、ほかに燃え移らないようにするのが消火の仕事だったようです。また、消防ポンプといえば聞こえはいいのですが、そのころは、荷車か荷馬車に積んだ箱形の手押ポンプでした。

七十年は経ってますが、今の消防の設備を見るとほんとうに驚くばかりです。

古平町岬短歌会十二月詠草

長崎フユ

雲もなく星なき空の三日月へにらめっこするわれは八十歳

竹内コト

届きたる柿の箱より友書きしあいさつ状いでてうれしく読みぬ

榊　佳代

広報車は通行止めを流し行くまたの事故かと不安のよぎる

池田テル

茹で栗を食べつつ昔囲炉裏火に焼きしその味恋ほしみてをり

菅原節子

奥様の面に似せたる大黒様描きし背の君のお心やさし

鈴木時子

鉢植ゑのみかんいくつも色づかせ「生り年です」と友のおくゆかし

奥山きよみ

師走半ばの雨に軒下の土見えて春の如しときみは声挙ぐ

田中香苗

眠られぬ夜は小声で口ずさむうたひし秋田の唄を

丹後初江

車窓より見上る断崖のかけ網にさがる氷柱のあぶなげな事

山口スヱ

古障子張り替ふるさへうれしくて正月迎へき今になつかし

堀　典子

いと暗き不況にさいなみ如何とや頼む政治を待ち倦むなり

古平ホトトギス会

予報士の外れたる今朝の吹雪かな　斉藤波留

成人の娘に友禅染を見立て来し　仲谷比呂子

新しき匂ひのするや新年号　仲谷安代

胸までのゴム長履いて若布刈　福井幸平

煤払い姉さん被り亡母　山口悦子

いつかまた装ふ日のあり袷縫ふ　大和田絵伊

ひとにぎり程の新海苔おすそわけ　大島喜恵

堰を止め大根洗う縄大束子　仲谷美砂

さんなしを啄む小鳥来てをりし　関口勝志

持ち寄りの冬至南瓜を庫裡に炊き　水見句丈

余所者に先を越されし茸山　越野敏雄

獅子座より流星燃ゆる岬かな　岩瀬みのる

長月も終りぬ病癒えぬまゝ　中村樺宵

鳶の笛弧を描きつゝ秋澄めり　越野清治

銀鱗の川面に躍り鮭帰る　外山俊久

紅溢れ光溢るゝ林檎園　西島サツ子

水ぞくかんいるかもますもジャンプして　小五　水見翔人

とんぼらはたくさんとんでそらひろい　小一　水見玲央